

書 評

荻須博士 著

日本中世禪宗史を読む

陸 川 堆 雲

荻須博士の新著日本中世禪宗史は、A 5判。索引共四五〇頁以上の大冊。印刷鮮明、装幀堅実、博士の人格と識見の一端を感じることができる。巻頭には大

灯国師の頂相、関山国師の筆跡その他数葉の写真版がある。猶巻中には松源崇岳、運庵普巖、虚堂智愚、宗峰妙超の頂相があることは、初学のことを喜ばしむるに足る。

内容について見ると、全巻を六大区分としている。一、日本に伝来した禪。二、鎌倉時代の禪の主流。三、宋代禪の潮流と日本禪界への影響。四、南浦紹明の日本禪宗史上の地位。五、宗峰妙超とその禪。六、関山慧玄の諸問題となつて外に結論がある。これにてその概要を知ることができるが、更に細目の小区分がある。いまその詳記は省略するが、実は

この細目が、内容を提起している大切の露頭である。題名は山田無文老師の染筆によつて飾られている。

従前より今日までに書かれた、日本禪宗史は沢山あるが、禪宗史学の進歩により、新史実の発見等があるので、近代感覺よりいづれも少しずれていて、吾等にはあきたらぬものであった。然るに博士のこの著によりて、この憾みは全く解消することになった。即ち日本中世禪宗史は、博士の専門中のお得意のもので、新しき資料を巧みに馳騁して、執筆されているので、今後禪門の史観に清新の空氣を与えることになると思う。いまその記述について、聊か私見を以て論評を加えつつ、その内容を紹介することにする。

日本に伝来した禪という条下に於ては、鎌倉以前の禪より筆を起し、二十四

流、四十六伝の由来を記している。この流伝について従来の所伝と趣を異にするところは、釈半人子の宗源図等を引用して、論述しているなどである。

鎌倉時代の禪の主流については、日宋の交通と禪。禪の中心地と時代的考察等の項目を立て、入宋僧の理想及び目的の変化を叙し、荣西禪師の禪流より聖一、法灯の禪流を論じ、禪の興隆に対する叡山の圧迫についての法難を記し、鎌倉幕府の庇護により、拾頭のできた経緯が詳述されている。特に聖一国師についての記述は、数頁に亘り、よくその周辺と禪宗流伝の分析をされていることは、甚だ喜ばしい。

さらに喜ばしいことは、心地覚心についての詳細なる記述である。心地覚心については、従来何れの禪史に於ても、略記されがちであるに反し、博士は心地覚心が、京洛の地を離れた僻遠の地に於て、その生涯を終始したことを詳述し、心地覚心が京洛の地を顧みざりし識見は、彼の北越の地に禅幢を建てた道元禪師に、一步を先んじているものとして、

その芳園を称していることは、私の得意とするところで、著者に敬意を払うものである。

凡そ日本禪宗を論するには、中国の禪流を顧みねばならぬが、最も影響のあるのは南宋禪である。著者は南宋禪につき、その推移と変遷を記し、我が国との關係に及び五山文学に至る徑路を詳説し、これに数頁を費している。

かくて禪は東に於ては、鎌倉幕府により、又京洛の地に於ては、皇室の庇護により確固たる地歩を築くことに成功した。殊に大応、大灯両國師は、後宇多上皇や花園天皇、後醍醐天皇の御帰依により、又夢窓國師はこの間にありて、足利幕府との關係も密接となったのであるが、これについての記述は、よくその要を尽くしている。

而して当時の禪の内容については、大灯百二十則なる文書を中心として、これを解剖し、大灯國師により一応の禪組織ができたとして、これに七十二頁を費して詳論している。この結論については、私見を挟む余地ありと思われるが、兎も

角從來の所説に一步をすすめたものである。

そのあと関山國師の關係については、約百頁を費してこれを詳述してある。殊に生誕地、生年説、遺誠、頂相等については、著者は蘊蓄を傾けている。元來関山國師についての史実は、不明のことが多いのであるが、博士は國師と同じく信州出身である關係もあつて、親しく生誕地を踏査され、それにより知り得たる新

秋月龍珉氏著

公案

秋月龍珉氏が筑摩書房から「公案」と題する禪入門書を発刊された。從來の禪を解説した書物には見られない斬新さ、鋭さ、大胆さをもつ特色あるものである。特に後半の公案三十三則の章は著者の參禪實力を示す近代的提唱ともいふべきであろう。鈴木大拙博士の序文の一部を記して紹介にかえることとしよう。

資料を以て旧説を補訂しているなどは、学界のために喜ぶと共に、多年の勞苦に對し多謝してよい。

猶この書に於ては各項毎の末端に注として典拠を明記してあることは、後学を益すること多大である。これを要するに博士のこの著は、新鮮、明快、懇切の好著であるとして推奨すべきである。妄評を許されたい。

(昭和四〇、九、一一)

平野宗円

「秋月君は公案なるものを、今この書で詮索せんとする。平地に波瀾を起すどころではなくて、泥沼をかき乱すものと云つてよいかも知れん。考えてみれば、いらぬおせっかいだ。が、君はこの方面において、その蘊奥を尽した人だから、かくのごときものを著作するにはもつとも適切な論者だと云つてよい。公案にと

らえられ、そのほかに禅なしと思ひ込んでおる人のため、併せて世間一般のため大いに、裨益することを信ずる。」

古田紹欽博士 著

日本仏教思想史の諸問題を読み

荻 須 純 道

発行所 東京都千代田区神田小川町二ノ八 筑 摩 書 房

(B 6 判・二五三頁・価二五〇円)

日大教授古田紹欽博士が春秋社から、日本仏教思想史の諸問題を発刊された。本書は鎌倉・江戸の二部からなり、わが国仏教思想史上の重要な問題がとりあげられ、究明されている。いうまでもなく今日わが国における仏教教団の大宗派をなす大部分は、鎌倉時代に成立した宗派であり、今日における日本仏教の大部分は鎌倉仏教の延長である。したがって鎌倉仏教は重要な意義をもつものである。

本書の第一部においては、(1)鎌倉仏教における持戒持律主義と反持戒持律主義、(2)栄西における持戒持律思想の意義、(3)持戒持律思想の展開、(4)日蓮の思想にみる対法然教学について、(5)栄西の念仏勧修とその時代的意義、(6)禅院の儀

式作法の制定とその流行、(7)教行信証の原型に対する一推論、(8)教行信証における善の問題、(9)顕浄土真実教行証文類における化身土巻の意義、(10)普勧坐禅儀について、(11)寛元元年を境とする道元の思想について、の十一章からなっている。

平安末期以来、世を風靡した末法到来の時代思潮は浄土教の漸興をみ、武家が政権をとった鎌倉時代にいたり、法然は専修念仏を提唱して一宗を開立し、親鸞は悪人正機・信心正因の浄土門を説いた。念仏の一行に生き、さらにまた弥陀の本願を信ずることによって、持戒者も破戒者も救われると説く、反持律的な徹底した仏教が樹立した。しかし鎌倉仏教には一方においては戒律運動があつた。

末法なるが故に、正法にたちかえり、釈尊にかえれと叫ぶ運動である。いづれも真実を把握しようとするにはかならない。鎌倉仏教には持戒持律主義と反持戒持律主義の二潮流があつた。本書はまず第一章においてこれを明示し、この範疇にしたがつて諸問題が究明されている。

第二部は(1)いわゆる黄檗禅の臨済正宗について、(2)道者・超元の来朝とその影響、(3)潮音道海の臨済・曹洞禅批判、(4)盤珪永琢と洞門の人々、(5)独庵玄光の思想、(6)月舟宗胡の思想、(7)徳翁良高における宗弊改革思想の淵源、(8)元山道白の思想とその復古の業績、(9)元山道白と臨済禅との交渉の九章からなっている。鎖国日本の江戸期においては、長崎を通じて近世仏教の建設がなされねばならなかった。隠元の来朝はわが仏教界に大いなる影響を与えた。第二部は黄檗禅を中心に諸問題を提起している。第一部・第二部を通じて大部分が禅に関する論著であり、あえて諸賢にすすむる所以である。

発行所 東京都千代田区神田宮本町一〇

春 秋 社

(A 5 判・二八八頁、価一、五〇〇円)